

## D. I. フォンヴィージンの 『フランスからの手紙(1777-1778年)』について

村田 真一

### はじめに

本誌第4号から第6号にわたって、『フランスからの手紙(第1部-第3部)』を全訳、掲載したが、本稿では『手紙』の成立事情、ならびにそこから読みとれるフォンヴィージンの思想をめぐって略述しておく。なお、『フランスからの手紙』を手がかりに、フォンヴィージンのロシア観と西欧観を論じたものに、拙論『フォンヴィージンのロシア観と西欧観』(『ロシア語ロシア文学研究』第20号, 1988年, 日本ロシア文学会)があるので、参照されたい。

### 1

フォンヴィージンの生涯におけるさまざまな活動の時期は、外務省入省時代(1762~69年)、パーニンの秘書時代(1769~82年)、職業作家時代(1782~89年)の3期に大別できる。『フランスからの手紙』がかかれた1777年から78年は、フォンヴィージンにとって2つの意味で大きな転換期だった。第1に、宮廷政治に嫌気がさし、外交官の職を離れて文筆で身を立てようと考え、新しい劇作の構想を練っていたこと。第2に、プガチョフの乱の鎮圧後、ロシアの民衆の力の大きさに驚愕し、農奴制を含め、ロシアの国家体制のあり方を再考し始めたこと、である。この2つの意味は、互いに深く結びついており、代表作『親がかり』の成立で一体化することになるが、『手紙』と劇作とのかわりについては、ここでは論じない。

1777年8月、妻の病氣療養を名目にペテル

ブルクを出発したフォンヴィージンは、ワルシャワ、ドレスデン、ライプツィヒ、フランクフルト・アン・マインなどを経た後、フランスへ入り、ストラズブル、ブザンソン、ブル・アン・ブレを抜けてリヨンに達する。そして、モンペリエに約4か月滞在した後、パリに入る。『フランスからの手紙』とよばれるのは、ロシア暦1777年11月22日付のモンペリエ発信の手紙から、1778年9月18日付のアーヘンからピョートル・パーニン<sup>1)</sup>宛に送られた8通の手紙を指す。手紙をかき送ったフォンヴィージンの意図は、パーヴェルの後見人だったパーニンの弟ピョートルへの書簡という形式で、フランスに盲目的に追従していた当時の宮廷貴族をやり玉にあげることにあつたといえる。家族に宛た手紙も残っているが、これはパーニン宛書簡の下書きになっており、後にパーニン宛の手紙を作品として発表しようという作者のねらいがあつたことをうかがわせる。

『フランスからの手紙』が初めて活字になったのは、1830年に出版されたフォンヴィージンの選集においてである<sup>2)</sup>。

### 2

フォンヴィージンのフランス批判は、リヨンの街路の描写から始まっている。正常な五感をもった人が住めるはずのない悪息に満ちた不潔な通りは、怠惰な人びとの群れであふれている<sup>3)</sup>と指摘するフォンヴィージンの筆は、フランス人とその性格描写に及ぶと、さらに容赦なく走る。この姿勢は終始一貫している。フォンヴィージンが生涯追究した課題

は、真の人間とは何か、真に人間性を備えているとは何を意味するかということであり、これは彼の劇作にも反映され、戯曲の中心テーマのひとつになっている。本稿でも、フォンヴィージンの人間観察を核にして議論を進めることにする。

「フランスの第1の権利は、自由です。しかし、彼らの真の現状は、隷従です。貧しい者は隷従的労働によらなければ、自分の食を得ることは不可能ですし、もし、貴重な自由を利用したくなれば、餓死することになるからです<sup>9)</sup>。」

こう指摘したフォンヴィージンは、同胞人の置かれた状況を思いうかべたにちがいないが、フランス人とロシア人の状況の差異は、人間性において顕著に現われているとみている。

「人の心の第1の法であり、人びとの間で第1の連盟であります—善なる信頼—が消え去ったとき、最良の法は何も意味しないのです。私たちのところには、それは少しは存在しますが、当地ではかけらほどもありません<sup>9)</sup>。」

フォンヴィージンはここで、「善なる信頼」が少しは存在するロシアが、それを全くもっていないフランスを模倣する意味などありはしないと訴えるにとどまらず、本当に賢明で価値ある人びとはどこでも少ない<sup>9)</sup>からこそ、そうした人びとをロシアに目覚ませる必要があると説くのである。さらに、

「賢明なる人びとは、いかなる国民であれ、その人たち同士でひとつの国民を形成しています<sup>9)</sup>。」

と述べ、彼の理念はロシアのみならず、グローバルなレベルで意義をもつことを示している。この理念を実現させるためには、エカテリーナ2世流の「啓蒙主義」、宮廷貴族の濫用や徳の荒廃をロシアから排除していくことが不可欠だと彼は考えていた。その意味で、喜劇『旅団長』や『親がかり』は、諷刺

的な作品であると同時に、宮廷貴族に向けられた恐るべき武器でもあったのだ。後になって、プーシキンがフォンヴィージンを「大胆なる諷刺の君主<sup>9)</sup>」と評したのもうなづける。

フォンヴィージンは、パリからパーニンに対し、フランス人の国民性を吟味した結論を次のように報告する。

「ロシアにおいて悪用や無秩序を目のあたりにして憤り、心中でロシアをよそよそしく感じ始める者がいますなら、彼を然るべき祖国愛に目覚ませるには、一刻も早くフランスに送る以外に確かな手立てはないということです。ここでは、当地の完璧さに関する話は、すべて全くの偽りに他ならず、人はどこでも人であり、本当に賢く価値ある人間はどこでも稀れで、わが国では、時にはいかに悪いことがあるとも、良心が平静で、想像力が理性をではなく、理性が想像力を支配していれば、他の土地とも同じくらい幸福であるのだということを、自らの経験によってすぐに知ることになります<sup>9)</sup>。」

この件りは、『旅団長』のフランスかぶれのイワヌシカを連想させずにおかないばかりか、いかに多くの「イワヌシカ」がロシアに生き続けていたかということを証言している。また、賢く価値ある人間とは理性的人間であることも裏づけている。

フランス人の「理性に対する思い上がり」についても、その「理性」の意味を分析することによって、それが人間理性と異なり、良識に支配されない「理性の明敏さ」であり、生きるための便法にすぎないと定義づけている。さらに、フランス人の「理性」は、常に外的事象に向けられ、彼らの全生涯は自らの内ではなく外にあると述べ<sup>10)</sup>、自己を省略することによって個の全一性や完全性を追求しようとする人間的思考の試みとは無縁であるという認識がフォンヴィージンにあったことも示している。フランス的理性は、ロシア的 душа、さらには普遍の人間性とは相い容れ

ないものだという見方は、フォンヴィーゼンの世界観を探る上で大きな手がかりになる。しかし、この認識が後れ彼の伝記をかいたヴァーゼムスキーには気に入らなかった<sup>11)</sup>。ところが、この認識こそ、「自律的にものを考えるようになり、ヨーロッパの高い所において、ヨーロッパ的世界文化をわが物とするのみならず、そこに創造的に参加しようと試みたロンヤ人<sup>12)</sup>」たち、すなわちスラヴ主義者の思想と似通うところである。すでに18世紀後半、ロンヤ人であることを失わずに真のヨーロッパ人であろうとしたのが、他ならぬフォンヴィーゼンだった。

フォンヴィーゼンの批判の目は、フランスの僧侶にも向けられる。

「僧侶たちは、訓育を手中におさめまして、人びとに、ある面からは、妄想と聖職者の利益に対する盲目的愛情を植え付け、別の面からは、良識に対する強い嫌悪を吹き込んでいるのです<sup>13)</sup>。」

このモンペリエでの印象は、フランス滞在中、彼の頭を離れることはなかった。アーヘンからの手紙でも、僧侶が若者に偏見を吹き込むため、彼らは聖職者に対する屈従の念だけで育つ<sup>14)</sup>と述べ、さらに追い打ちをかけている。厳格な正教徒としての教育を受けたフォンヴィーゼンのカトリック批判の矢面に立ったのは、フランス社会に強大な力をもっていた聖職者階級だった<sup>15)</sup>。

彼は、百科全書派の哲学者の観察から、

「ほとんどすべての人のうちに多くの高慢さや虚偽、利己主義や最も俗悪なへつらいがうかがえました。彼らのうち誰ひとりとして、利己心や虚栄のために最も軽蔑すべき卑俗な行為をするのにためらうはずもないでしょう。この世に哲学と哲学者ほど、互いによく似ていないものを他にみません<sup>16)</sup>。」

という結論を引き出しているが、別の個所で哲学者の全体系は、宗教を人間の倫理的行動の基盤とせず、神の存在認識を欠落させてい

る<sup>17)</sup>とも述べ、哲学と宗教は互いに相い容れないものではないという見方をとっている。

フォンヴィーゼンは、ルソーに会うことを強く望んでいたが、彼の自殺で実現していない。7通目の手紙には、死ぬ直前のルソーの様子が生き生きと描かれている。また、フォンヴィーゼンは、ルソーの『告白論』になぞらえた自伝も残している<sup>18)</sup>。人間の自然の状態は、友情と調和が支配しているとするルソーの立場に、人間同士の善なる信頼の実現を志向するフォンヴィーゼンが共感を覚えないはずはなかった。

### 3

1777年12月24日付モンペリエからの手紙は、フォンヴィーゼンのフランス旅行の目的のひとつに、フランスの法体系の研究があったことを物語っている。フランスの法体系を「非常に賢明で長い年月と稀れな知によって築かれた建造物<sup>19)</sup>」と評価するフォンヴィーゼンは、濫用と徳の荒廃がその建造物を基礎からぐらつかせている事実を見抜く。そして、その「人災」をもたらす原因は、すべて「フランス人に信じられないほど無視されている教育にある<sup>20)</sup>」と断言している。その教育を手中に入れているのが聖職者階級だ、と指摘していることは前述の通りである。

その他、フォンヴィーゼンが酷評した対象は、官職売買、訴訟問題の扱い、軍隊の無秩序、パリの警察、物乞い・売春婦の多さ、観賞に値しない悲劇上演などに及ぶ。一方、高い評価を与えているものに、マニユファクチュアの発達より、喜劇の完成度の高さ、趣味流行に関する仕事のすばらしさがあることもつけ加えておく。

『フランスからの手紙』のなかで、ひと際精彩を放つのがフランス人の性格の批判的描写だということは、かき手の意図がフランス人の国民性のイメージを浮き彫りにすることにあつたことを物語ると同時に、『手紙』が劇作家フォンヴィーゼンのつづった文学的な風俗画だということを示している。

## おわりに

フランスをあとにしたフォンヴィージンは、

「フランスでの滞在は、私の考えのなかでこの国の価値を大幅に減じました。良いものは思っていたよりずっと少なく、そして悪いものは想像だにしていなかったほど多く発見しました<sup>21)</sup>。」

と述べている。このフランスへの「幻滅」は、彼が単なる反西欧主義者だったことを意味するものではない。それは、18世紀ロシアの貴族の間に蔓延していた幻想的な西欧観に対する彼自身の幻滅に他ならなかったのである。およそ百年後に、普遍的人間性がロシアの国民的理念なら、各々がロシア人になることこそ先決だ<sup>22)</sup>と説いたドストエフスキーの見解

を先取りしたフォンヴィージンは、紛れもなく18世紀最初の悩めるロシア・インテリゲンツィアだったといえよう。

なお、グロフスキーの指摘するように、手紙が文学の領域へ入り込む規準が、「文学的推稿」と、「宛名人以外にも複数の人間が読むことを当て込んでいること<sup>23)</sup>」だとすれば、家族宛の手紙がパーニン宛書簡の青写真になっていることを考え合わせた場合、手紙を最初にロシア文学のジャンルに加えたのは、フォンヴィージンだということもわかる。かき手の私見があますところなく披瀝され、ラジーンチェフの『ペテルブルグからモスクワへの旅』や、カラムジーンの『ロシア人旅行者の手紙』登場の路を開いた『フランスからの手紙』は、書簡体文学として高く評価されて然るべきだろう。

## 註

- 1) ビョートル・パーニンに関しては、「言語・文化研究」第4号の註参照。
- 2) „Собрание сочинений Д. И. Фннвизина, 1830“ を指す。
- 3) 『言語・文化研究』第4号 21頁参照 (以下、「cf. 4-21」のように略記)。
- 4) cf. 4-23.
- 5) cf. 4-24.
- 6) cf. 6-25.
- 7) cf. 6-18.
- 8) Цошкин А. С.: Полное собрание сочинений, т. 6, стр. 12.
- 9) cf. 5-38.
- 10) cf. 5-41, 42.
- 11) ヴァーゼムスキーは、1848年に出版した „Фун-Визин“ のなかで、フォンヴィージンのフランス批判は度が過ぎると非難さえしている。
- 12) Бердяев Н. А.: Хомяков, 1912, М., стр. 3-4.
- 13) cf. 4-23.
- 14) cf. 6-20.
- 15) フォンヴィージンと正教をめぐっては, „Strycek A.: Denis Fonvizine. Paris.. 1976“ も参照されたい。
- 16) cf. 5-43.
- 17) cf. 6-19.
- 18) „Чистосердечное признание в делах моих и помышлениях“ (『我が所業と思考の率直なる告白』)。未完の自伝で、削除なしの形で世に出たのは註2) にあげた選集においてである。早くから諷刺に興味を覚えたが、その分別を欠いた筆の辛辣さが人から嫌悪されたことなど興味深いエピソードが散りばめられている。
- 19) cf. 4-23, フォンヴィージンの法体系についての考え方に関しては, „Рассуждение о непреленных государственных законах (『国家枢要の法に関する考察』)“ に詳しいが、彼は真に啓蒙された人間である君主が国を治める立憲制を理想的国家体制とみていたことがわかる。
- 20) cf. 6-20.

- 21) cf. 6-18.  
 22) Достоевский Ф. М.: Дневник писателя. Полн. собр. соч., в 30 т., 1973, т. 25. стр. 23.  
 23) Макогоненко Г. П. 編: Письма русских писателей XVIII века, 1980, стр. 26-27.

“Lettres de France” (1777-1778)

de D. I. Fonvizin

MURATA Shin'ichi

Ce travail se propose d'exposer la conception du monde et les idées de Fonvizine, telle qu'elles résultent des descriptions contenues dans les “Lettres de France”, déjà intégralement traduites dans les numéros 4 et 6 de notre journal.

C'est grâce aux “Lettres” que nous pouvons avant tout comprendre que Fonvizine, en même temps qu'il dénonce la France du 18ème siècle, étant à cette époque là le centre de la culture occidentale, critique bien aussi la réalité russe.

Autrement dit, il ne s'agit tout simplement que la désillusion du voyageur russe en Occident mais aussi du désabusement de toutes ces conceptions traditionnelles dont le noble russe introduisait en Occident. Et c'est la désillusion qui fait revivre, en Fonvizine, le désir de faire naître parmi ses compatriotes, non pas l'intérêt pour la “raison” française, mais pour l'âme de l'homme, dont la base est la “bonne foi”.

En examinant “l'humanité”, qualité commune à tous les hommes, dont Dostoevskij même s'en occupa à son époque, Fonvizine adresse son propre chemin dans une direction qui n'est pas “contre l'Europe” mais bien “au dessus de l'Occident”. L'influence que cette direction exerce sur la création de sa comédie “Le Mineur” est très importante.

Grâce à tout ce que nous avons exprimé nous pouvons peut-être considérer le dramaturge comme l'un des premiers véritables “intelligents” de son époque.

(むらた しんいち ロシア文学, 演劇)

(1988年10月15日受理)

## 『言語・文化研究』第7号、正誤表

氏名	ページ,行	誤	正
佐藤 宏文	4,右5 5,右11 5,左40 7,右17 8,左10 9,右1, 4 10,レヅメ 2 10,レヅメ 3	dato と聞こえる, hisap] 語根〈galak〉 ／galak／のは, 参照の事。 Dewan Bahasa Indonesia Eijaan	dato' と聞こえる), [hisap] 語根〈galak〉 ／galak／は, 参照の事]。 <u>Dewan Bahasa</u> Indonesian Ejaan
太田 亨	16右19 16, 参 考文献	特に個々の… … 文法Ⅱ』	個々の… … 文法Ⅱ』
上野 勝広	21左33	balivia - nismo	bolivia - nismo

木村 琢也	42, 25	[v, z, ʎ]	[v, z, ʒ]
	45, 24	[ˈstar-re]	[ˈsta-re]
	45, 25	[s-ˈta-re]	[ʃ-ˈta-re]
	46, 21	in W/m <sup>2</sup> ν	in W/m <sup>2</sup> , ν
	47, 7	tskuau	tsukau
佐藤 邦彦	61	yes or on	yes or no
	62	une vasi ja	una vasi ja
	62	una vai i ja	una vasi ja
	62	hondo 例には	例はhondo には
	63	両形容詩の	両形容詞の
	63	表意単どうし	表意単位どうし
	64	「積極的事実」あくまでも	「積極的事実」はあくまでも
	66	「中沢, 1986:p.20 )	(中沢, 1986, p.20 )
	66	(Martine, 1970:p.35)	(Martinet, 1970···)
	67	メタリズム	メンタリズム
	67	古典主義整合性	古典主義的整合性
	67	実証主義の問題。そして	実証主義の問題、そして
	68	認 継	認識
	69	乗っ取る	則る
	69注3	「入れ子」型図式の 妥当性について熟考を	「入れ子」型図式の 妥当性については熟考を
	70注11	differ frome	differ from に 熟
	71文献	Barthes, R., …青土社	…みすず書房

		伊藤俊太郎	伊東俊太郎
	7 3	SATO Kunihiro	SATO, Kunihiro
	7 3	bien qu'elle praisse	bien qu'elle paraisse
林 修	83左25 84右42 87左30	そのものに 支配／非支配関係 文節化	そのものに 支配／被支配関係 分節化
岡田 真弦	100,左 8	得んだがために	得んがために
榮谷 温子	110,右 1-5 112,レヅ ム、,1 112,レヅ ム、,2	Arabi  prooves	Arabic  proofs
村田 真一	115,右 1 115,右 4 116,註 2)	フォンドィージン  ヴァーゼムスキー  ФННВИЗИНА	フォンヴィージン  ヴァーゼムスキー  ФОНВИЗИНА



	116, 註 8)	Ц о ш к и н	П у ш к 1
	116, 註 11)	Ф у н — В и з и н	Ф о н — В и з и н
	117, レジ ユメの夕侍 ル	D. I. Fonvizin	D. I. Fonvazine
村上 結花	119 左 16-17	М а r u g y e	М а n u g y e
	120 左 13	] М а n u g y e	[ М а n u g y e
	〃 28	М а n u g y e VI — 6	М а n u g y e VI — 1 6
	120 右 22	М а h u g y e	М а n u g y e
	121 左 7, 12	М а n u g y e V — 1 8	М а n u g y e VI — 1 8
	〃 34	А t t a t h a n k e i p a 375	А t t a t h a n k e i p a 375
	121 右 31	А t a t h a n h e i p a 391	А t t a t h a n k e i p a 391
	122 左 41	3 9 4 <sup>11)</sup>	3 9 4 ] <sup>11)</sup>
	123 右 7	] М а n u g y e	[ М а n u g y e

	124, 4) // ,5)  // ,8) // 参考 文献	(L i n g y i = 「戸口は出ている こと」 アタタンパ   ケ Manugye danmatha.	(L i n g y i = 「戸口に出ている こと」 アタタンケーバ Manugye danmathat.
葉 氷瑩	125, およ び 目次	葉 氷 瑩	葉 氷 瑩

## 『言語文化研究』第7号 正誤表

頁,段,行	《誤》	《正》			
4右 5	dato <sup>c</sup>	dato'	108 左 下から1	見を屈め	身を屈め
5右11	と聞こえる、	と聞こえる)、	112 嫌 下から2	Reveries and Sutudies...	Reveries and Studies...
40	hisap]	[hisap]	112 ヴィメ 1	Arabi	Arabic
7右17	/galak/のは、	/galak/は、	2	prooves	proofs
8左10	参照のこと。	参照のこと。]	115 左 1	フォンドイージン	フォンヴィージン
9右1, 4	Dewan Bahasa	Dewan Bahasa	3-4	ヴァーゼムスキー	ヴァーゼムスキー
10 ヴィメ 2	Indonesia	Indonesian	116 註 2)	Финвизина	Фонвизина
3	Eijaan	Ejaan	8)	Цошкин А. С.	Пушкин А. С.
16右18-19	特に、特に個々の...	特に、個々の...	11)	Фун-Визин	Фонун-Визин
鱗嫌 4	...文法II]	...文法II]	117 ヴィメ 題	D. I. Fonvizin	D. I. Fonvizine
21右33	balivianimso「ボリビア方言」	bolivianimso「ボリビア方言」	119 左16-17	Manugye	Manugye
42 25	[v, z, ʃ]	[v, z, ʒ]	120 左13	]Manugye VI-28]	[Manugye VI-28]
45 24	['star-re]	['sta-re]	28	Manugye VI-6	Manugye VI-16
25	[s-'ta-re]	[s-'ta-re]	右22	Mahugye	Manugye
46 21	in W/m <sup>2</sup> v	in W/m <sup>2</sup> , v	121 左7,12	Manugye V-18	Manugye VI-18
47 7	tskuau	tsukau	34	Attathahkepia 375	Attathankeipa 375
61左 下から3	yes or on	yes or no	右31	Atathanheipa 391]という。	Attathankeipa 391]という。
62左 下から13	une vasija honda	una vasija honda	122 左 下から3	394 <sup>11)</sup>	394] <sup>11)</sup>
12	una vaiija profunda	una vasija profunda	123 右 7-8	]Manugye VI-16]	[Manngye VI-16]
右 下から11	このようなhondo例には	このような例はhondoには	124 注 4)	(Lingyi=第1夫)	(Lingyi=第1夫)
63左10	両形容詞の	両形容詞の	5) 2	「戸口は出ていること」	「戸口に出ていること」
右 下から1	表意単どうし	表意単どうし	8)	アタタンパ ケ	アタタンケーパ
64右5-6	「積極的事実」あくまでも	「積極的事実」はあくまでも	鱗嫌 4	Manugye danmatha.	Manugye danmathat.
66右20	「中沢, 1986 : p.20)	(中沢, 1986, p.20)	125, 扉目次	葉冰 瑩	葉 冰瑩
35	(Martine,	(Martinet,			
67左12-13	メンタリズム	メンタリズム			
下から1	古典主義的整合性	古典主義的整合性			
右 下から12	実証主義の問題。そして、	実証主義の問題、そして、			
68左 下から10	認識	認識			
69左 4	乗っ取る	則る			
注 下から9-8	妥当性について熟考を	妥当性については熟考を			
70注11) 2	deffer frome	differ from			
71 鱗嫌 2	東京. 青土社.	東京. みすず書房.			
下から12	伊藤俊太郎	伊東俊太郎			
73 3	SATO Kunihiko	SATO, Kunihiko			
18	bien qu'elle praisse	bien qu'elle paraisse			
83左25	そのものに	そのものに			
84右42	支配/非支配関係	支配/被支配関係			
87左30	文節化	分節化			
100 右 8	得んだが為めに	得んが為めに			